

アカダマ、と名づけてみた

牧師 山本護

「コナラ」だと思っていた伝道所入口の木に奇妙な実がついている。コナラではないのかね。数冊の図鑑やインターネットで調べても判明しません。若葉の季節に種子を内包した通常の実とは考えにくいし、突然変異か、何かの病巣なのでしょうか。謎めいた出来事は問いであり、判らないという困惑をしばらく楽しみました。

これが何なのか未だ不明なため、とりあえず「アカダマ」と名づけ、樹種を「アカダマの木」としておきましょう。思い起こせば子供の頃、自家命名の生物がたくさんいました。くさい匂いを出す「ヘッピー芋虫」とか、暗い池にいたイボのある「ドク蛙」とか。

「主なる神は、野のあらゆる獣、空のあらゆる鳥を土で形づくり、人のところへ持って来て、人がそれぞれをどう呼ぶか見ておられた。人が呼ぶと、それはすべて、生き物の名となった(創世 2:19)」。



現代でも、原始生活をする民の命名はおそろしく複雑多岐にわたっているそうです。要するに雄雌や幼老の形態違いが別種の生物区分になるため、ネーミングが全部異なる。そのことから類推するに、「初めの人」の被造物命名は随分苦労したであろう、と思います。私などは生涯の内、十か多くて二十くらいを命名するに過ぎず、この春は奇妙な物体を「アカダマ」と名づけて喜んでいるくらいですから呑気なものです。

男は女と共に、神に背いて「善悪を知る木の果実」を食べました(3:6)。するとどうなったか。男は「アダム」という名を得(3:8)、その「アダムは女をエバ(命)と名付けた(3:20)」。彼らはもはや被造物の基なる「土(アダマ)」由来の「人(アダム)」(2:19)とは別分類になり、また男とか女とかの違いでもなく、唯一の存在「エバ」と唯一の「アダム」という存在になりました。これが神に背いて自らを負う(3:23)「自由」なのかもしれません。

一人ひとりに名前があっても、群衆になると烏合の衆で、いちいち唯一の存在などと言っていられません。「俺一人いなくなっても変わらない」組織や仕事場。口では人権とか個性とか美しいですが、どんな世間でも規格内の差異が求められます。

「羊飼いは自分の羊の名を呼んで連れ出す(ヨハネ 10:3)」。私たちは羊飼いキリストの「声を聞き分け(10:3)、ついて行く(10:4)」。名を呼ばれ、奥底の存在が呼び出されて自己が見出される。キリストはすべての羊を唯一無二の存在とする。ということは、群に適合する羊に躡けるのではなく、羊たちの調和と不調和による未知なる群が形成されるのです。

初夏に現われた奇妙な物体を「アカダマ」と名づけてみただけで、いろいろな連想が巡りました。これも命名に関する主なる神の促しなのでしょうか(創世 2:19)。Ω